

《国内展望》

日本と韓国との関係は 「敵対」以外存在しないのか —危機を乗り越える叡智を持つべき両民族—

(2013年8月29日)

さる8月15日、日本からの独立を祝う68回目の「光復節」当日、韓国ソウルの中心部、光化門付近で激しい政府糾弾デモが行われた。数万人規模のデモに対し、朴槿恵政権誕生後初めてとなる放水銃による鎮圧が実施され、数百人が連行されている。じつはソウルでは10日夜にも「国家情報院が昨年の大統領選に介入した」ことに関して

真相究明を求める数万人規模の抗議集会が行われた。エジプト騒乱にも似た隣国のこの状況を、日本の大新聞、テレビ局は一切無視し、どの局も新聞も報道していない。韓国の現状を隠し続ける日本のマスコミこそ、日韓関係正常化をブチ壊す真犯人なのではないだろうか。

「慰安婦」に対する韓国側の主張

米国ロサンゼルス近郊のグレンデール市に慰安婦像が建てられ、在米日本人などの強い反対を押し切り、7月末にはその除幕式が行われた。橋下大阪市長の慰安婦をめぐる発言が話題になり、揚げ足取りのような格好で橋下が叩かれたことは記憶に新しい。慰安婦問題に関しては、多くの日本人は話題にすることを避け、また「ありもしなかった従軍慰安婦の捏造話が増幅されている」と嫌悪感を露わにする。だが日本人のほとんどは、慰安婦に関しての韓国側の主張を聞いていない。いや、報道されていないから、知らないのが現実だ。日本のマスコミは韓国側の主張を正しく伝えようとしない。

韓国側は慰安婦問題に関して、日本に7項目を突きつけ、解決を求めている。まず、韓国側の要求が何なのかを知る必要がある。相手方の要求を正しく理解しない限り、こちらの主張は空振りを続けるだけだ。韓国側の要求は、以下の7項目である。

- ① 慰安婦に関して真相を究明せよ
(注:「真相」とは韓国側が主張する真相)
- ② 慰安婦制度が犯罪であったことを認めよ
- ③ 日本の国会決議として韓国に謝罪せよ
- ④ 法的に賠償せよ

- ⑤ 責任者を処罰せよ
- ⑥ 日本の歴史教科書に慰安婦問題を明記せよ
- ⑦ 慰霊塔を建設し、資料館を設立せよ

大多数の一般日本人は慰安婦問題そのものが存在しないと考えている。これに関しては平成5年（1993年）8月に宮澤改造内閣の官房長官だった河野洋平の、いわゆる「河野談話」がたびたび話題となる。河野談話は「内閣の意思」として発表されたが「閣議決定」はされていない。談話は宮澤喜一が退陣する直前のもので、「従軍慰安婦」という戦後に新たに作られた造語を使い、その募集に「官憲等が直接これに加担したこともあった」と日本の軍や警察による強制連行を認める内容だった。しかし実は宮澤内閣はこの問題を1年半以上も精査し、内外で200点以上の公式文書を集めたが、どこにも「慰安婦」といった言葉や「強制連行」を認める言葉は見つかっていない。元慰安婦だったと自称する女性たちの証言を、調査することなく鵜呑みにして発表した河野談話は、その後いくつかの事実誤認も確認されているが、いまだに海外では日本政府の公式見解のように扱われている。

慰安婦など存在しないのだから、これに対する法的賠償など、もちろん存在しない。そもそも日本と韓国の間には、昭和40年（1965年）に締結された『日韓基本条約（正式名称は「日本国と大韓民国との間の基本関係に関する条約」）』があり、ここには「日本の韓国に対する莫大な経済協力、韓国の

日本に対する一切の請求権の解決、それらに基づく関係正常化などの取り決め」が明記されている。日韓両国が合意し調印した、国際法上もまったく完璧な正式文書であるにも関わらず、韓国側はこれを無視した発言を繰り返しているのだ。

責任者を処罰せよという要求に関して、多くの日本人はその真意を理解できない。「そんなことを言っても、責任者など死んでしまっているから」などと口にしたら、「責任逃れ」と糾弾されるのがオチだ。昨年8月に李明博（当時大統領）が竹島に上陸し、その後天皇に対して「土下座して謝罪すべきだ」と発言したとか、それはオーバーな表現でそれほど強い主張ではなかったとか報道されているが、韓国側の真意はここにつながる。つまり韓国側は、慰安婦問題は存在し、その最高責任者である昭和天皇に対し、いまからでも処罰を与えよと主張しているのだ。

一つ一つ細かく分析し解釈する必要など、もはや必要ないだろう。慰安婦問題に関する韓国側の主張7項目は、日本としては何一つ、微塵たりとも妥協できるものはない。そもそも韓国が、この7項目を通して最終的に突きつけているものは、日本国の解体である。日本が国家として存在していること自体を認めたくない。それが韓国の本音なのだ。韓国の本音がわかってしまうことを恐れ、日本のマスコミは韓国の主張を正確に報道しない。だからいつまでたっても、両国の国民は理解できず、苛立つだけなのだ。

国家百年の計

慰安婦問題にしても竹島問題にしても、日本側は歴史的事実を検証し、一つ一つていねいに理解を求めてきた。ところが韓国は、まったく聞く耳を持たない。

そのうえ、耳を疑いたくなる暴言を吐き、途方もない要求を突きつけてきている。

「冗談じゃない。こうなったら国交断絶あるのみだ！」と声を荒立てる方も多いただろう。国交断絶はあり得ないものではない。

その選択肢は、残されている。

断絶すれば、当面はこちらの腹は収まるかもしれない。だが、それで問題は解決するのだろうか。ますます混乱し、深みに嵌まり、百年後、二百年後も同じ議論を続けることになるだろう。

日韓両国民の未来のため、調和のとれたアジアを建設するために、問題をできるだけ早く解決しておく必要がある。

過去に学ぶ

かつて日本と朝鮮との間に「朝鮮通信使」という制度があった。この「通信」とは、こんにちの「コミュニケーション」という意味の通信ではなく、「信（まこと）を通じる」という意味である。

足利幕府が朝鮮に使者を送った返礼という形で始まったものだが、豊臣時代になると日本が朝鮮に出兵してくるかどうかを探るために、朝鮮側が使者を送ってきた。徳川幕府になった当初、幕府は朝鮮通信使を必要とは考えなかった。いっぽう朝鮮側は徳川幕府が朝鮮に出兵するのではないかと危惧し、それを抑えるために「朝貢使」として使節を送り込むようになった。このと

この問題の根源は、日韓両国民の足の置きどころの相違にある。日本人は「真実」だけが絶対だと思っている。

明治43年(1910年)の日韓併合についても、日本は真実の歴史を基に主張を繰り返す。慰安婦問題に関しても竹島問題に関しても、「真実はこうだ」と主張し、真実を受け入れない韓国を罵倒する。

韓国は「あるべき理想の姿」こそが「歴史」だと考えている。古今東西すべてにおいて、歴史とは強者の主張である。韓国人はそう考えているし、実際のところそれは正しい。つまり韓国にとっては、「知性の欠片もない日本が武力で無理矢理に韓国を併合した」ことがあるべき歴史であり、「日本軍部によって強制連行された従軍慰安婦」があるべき姿なのだ。

日韓両国がこうした自己主張を続ける限り、歩み寄りはない。

き日朝両国の間に立つて怪しい動きをしたのは対馬藩だった。

対馬藩は幕府に対し、「朝鮮側が徳川幕府を恐れ、朝貢をしたがっている」と伝えるいっぽう、朝鮮に対しては「徳川幕府は通信使の来朝を求めている。高邁な朱子学を伝授してほしい」と国書を偽造したのだ。こんにちのマスメディア、あるいは外務・通産官僚は対馬藩を演じているのかもしれない。当時、対馬藩は幕府・朝鮮双方にいい顔を見せ、朝鮮の釜山に出先機関を設けて日朝貿易を独占、おいしい思いをしたのだ。ちなみに釜山の発展は対馬藩による町づくりに端を発している。

朝鮮から派遣され日本に来た通信使は、まず、豊臣政権下の文禄・慶長の役（朝鮮出兵）の際に半島から日本に連れ去られた陶工などを連れ返すことを目的としていた。ところが当の陶工たちは住みやすい日本の生活に満足し、母国に帰ろうとはしなかった。

また朝鮮から来た通信使たちは、宴会の席に飾られた蒔絵や床の間に飾られた陶磁器、あるいは宴席の食器類まで持ち帰るようになり、さらには夜具を盗み、土地の人々が飼っていたニワトリまで殺して食べるといった乱暴狼藉を働いたのだ。仏像を盗んだまま返さなかったり、旅館の什器やテレビを持ち帰ってしまう来日韓国人は、朝鮮通信使と同じことをしているだけなのだ。

徳川幕府期で8回目となる正徳元年（1711年）の朝鮮通信使の時代に活躍したのが新井白石だった。新井白石は歴史、地理、文学そして殊に朱子学に秀で、旗本の地位にあったときに6代将軍家宣に認められ政治の中樞を支配する。新井白石は、初めは朝鮮通信使不要論を唱えていたが、最終的には朝鮮通信使接待の費用を従来の6割以下に下げることとした。また、それまで徳川将軍の称号が「日本国大君」であっ

「反日」を叫ぶ両班もどき

李氏朝鮮（1392年～1910年。1897年～1910年までの13年間は「大韓帝国」と称した）の時代、朝鮮には厳格な階級制度があった。差別を生むこの制度は李氏朝鮮末期の近代化「甲午改革（1895年）」にともなって廃止されたが、現実には現在も差別

たものを変更させ「日本国王」と変えさせている。

朝鮮側としては、中国の皇帝こそが最高位であり、朝鮮の王は中国皇帝の下の地位だから「王」、日本の場合は将軍の上に天皇がいるから将軍は「王」の下であり「大君」だという認識だった。これに対し新井白石は、天皇は中国皇帝と並ぶ存在であり、朝鮮のトップが「王」であるなら徳川将軍も「王」と主張。徳川将軍の称号を「日本国王」と変えさせた。

朝鮮からの通信使は当初から、朱子学の先達として、幕閣を蔑む雰囲気を持っていた。頭脳明晰という意味では当代一とされる新井白石が作った漢詩にしても、通信使はこれをさまざまな形で批判したのだ。ところが新井白石は通信使たちの批判を一つ一つ完璧に論破し、ぐうの音もでないほど叩き潰してしまった。

こんにち韓国は天皇を「日王」としている。天皇が「王」ではないことは、すでに新井白石の時代に論破している。なぜ「天皇」とせず「王」とするのか。なぜ外務省はそれを糾弾しないのか。

いま日本に必要なことは、新井白石同様に、彼らの得意分野に立って、ぐうの音も出ないほど叩き潰す叡智ではないだろうか。

思想が残っている。その階級とは、上から「両班」・「中人」・「常人」・「賤民（僧・妓生・医女・男寺党・奴婢・白丁）」とされる。

両班（韓国語ヤンバン・北朝鮮語リヤンバン）とは、李氏朝鮮の前に存在した高麗の制度を踏襲したもので、高麗では「文班」

と「武班」に分かれ、この二つを「両班」と呼んだ。この制度にならったものが日本の「文武両道」思想である。

高麗ではやがて「文班」が上級の貴族階級となり、「武班」は世襲制の軍人を指すようになっていたが、李氏朝鮮になると朱子学に秀でた学者や政治家が「両班」とされるようになり、これが世襲化され、「上級貴族＝両班」という枠組みが出来あがった。

階級制度は李氏朝鮮崩壊（＝日本による併合）とともに消滅したことになっているのだが、日本の敗戦により独立した1945年8月以降、ひそひそ話や噂などが飛び交い、なんとなく雰囲気として、かつての階級差別が復活していったようだ。そうしたなか、たとえば朴正熙（パクチョンヒ＝韓国第5～9代大統領）などは「朴白丁」と陰口を叩かれたりしていた。余談になるが朴正熙は朴槿恵（パククネ）現大統領の実父。文世光事件（1974年）のとき朴正熙を狙った弾丸を浴びて死んだ妻の陸英修（ユクヨンス＝朴槿恵の実母）は両班の出身との説もある。

本題から多少逸れて品性のない話になるが、韓国が経済危機に陥るたびに、女性たちが売春に出かけて外貨を稼ぐという話がある。ときに良家の子女までが売春ツアー

朴槿恵の正体

今年（2013年）6月末に中国を訪れた朴槿恵は、あでやかな黄色の服で身を包んでいた。黄色は王族の色。朝貢した李氏朝鮮の王が中国皇帝に媚びるスタイルである。そして習近平の母校、名門清華大学では漢詩を披露し中国語で演説を行っている。

に参加するという噂も聞かれる。いっぽう、体を売るのは下層階級の女性で、両班の女性は絶対に売春などやらないという話がある。現実にはその女性が本物の両班なのか、あるいは両班の子女が本当に体を売ることなどないのか、調べようがない。上級貴族の末裔を装い、両班を気取る者は、「私は体を売ることなど絶対はない」と胸を張る。

「反日」運動は、これと同じ「根」から発している。両班は日本による朝鮮併合を認めず、創氏改名に反対した。上級貴族の末裔である両班は、いつの世も「反日」を貫く。

「私は上級貴族の出で、だから文（知性）に優れ、そして当然ながら反日である」

これが韓国における「反日」の構図である。

知的な者、頭脳優秀な者は、「反日」であることが必然なのだ。「反日」を翳さなければ、知性が疑われると思っている。本物の両班かどうかより、両班を気取る「両班もどき」はことに「反日」を主張する。

したがって韓国のマスコミ人はほぼ全員が反日である。学者も、教師も、知的職業の人間は反日でないと素性を疑われ、蔑んだ目で見られてしまう。

朴槿恵の父君である朴正熙大統領は日韓基本条約に調印し、「漢江の奇跡」と呼ばれた経済復興を成功させた人物。父・朴正熙は大の親日家で、日本のカネで「世界最貧国」といわれた韓国を復興させた大統領。娘の朴槿恵も、本当のところは父にならっ

て親日家になるのではないかと期待していた日本人は、見事に裏切られた気分だった。だがよく考えてみると、流れ弾に当たって死んだ朴正熙の妻・陸英修は夫と厳しく対立し「青瓦台（大統領府）の最大野党」と陰口を叩かれた女性で、最悪の夫婦仲だった。朴槿恵はその母君の思想を継承した娘なのだ。

朴槿恵の父・朴正熙は李氏朝鮮の師範学校を最低の成績で卒業し、知力は劣るとされたが、武の才能には恵まれていた。日本の陸軍士官学校に入り、トップから3番目の成績で卒業している。しかし「朴白丁」と囃かれるほど（白丁とはかつて朝鮮では最低の身分）低層の出身だった。

朴槿恵は西江大学を首席で卒業しフランス留学も経験した才媛。父・朴正熙が「武」によって大統領の座を勝ち取ったのとは対照的に、「文（知力）」で大統領になった女性である。両班もどきを気取らなければ、韓国で政治家としてやっていけない、そんな追い詰められた状況にあるのだ。

朴槿恵大統領は訪中したとき、習近平主席に2つの要求をしている。1つは哈爾濱駅近くに安重根の石碑建設、もう1つは西安に抗日記念碑を建立することだ。

安重根はご存じのとおり韓国初代総監・元総理大臣の伊藤博文を暗殺した人物。西安は戦時中に「光復軍」を名乗る大韓帝国からの亡命者が潜んでいた場所だ。安重根の件に関しては以前本紙でも取り上げてい

る。西安の光復軍とは名ばかりのもの。少なくとも北朝鮮抗日ゲリラは日本軍と戦った実績があるが、亡命韓国人の光復軍は行動を起こした記録は微塵もない。

中国に対しこの2点を要求した朴槿恵の真意とは、「中国には絶対服従し忠誠を誓うから、歩調を合わせて反日行動を激化してほしい」との要請である。より明確にいうなら、日本に対して「三行半（みくだりはん＝絶縁状）」を叩きつけたということだ。

常識的に考えると、外交というものはどちらかに100%偏ることはない。五分五分を理想としつつ、こちらに寄る、あちらに偏るというものはある。ところが韓国の場合、0対100。100%中国に身を委ね、日本に対しては完璧に敵対すると表明したわけだ。韓国の「事大主義」を完璧に体現したのである。

じつに潔く、見事なものではないか。国家の命運を中国に預け、日本と完全に敵対すると宣言したのだ。命を賭したこの態度に、日本があいまいな態度を取るわけにはいかない。国交断絶などといって逃げるつもりもない。正々堂々、全知全能を傾け、正面から受けるべきなのだ。韓国が「日本解体」を求めている以上、こちらも国家の存亡を懸けた大勝負に出る覚悟が必要だ。

そのためにも、まずは、中途半端で曖昧なマスコミと官僚を排除しなければならない。自陣を固めない限り勝利はないものと考えよう。■